

日本語学習者の音調から表現意図を判断する能力の習得について  
中国語・韓国語母語話者の聴取実験より

大塚淳子

要 旨

文末に「ではないか」をとる表現は用法が多く、日本語学習者にとって話者の表現意図を判断するのが困難な表現のひとつだが、音調が話者の表現意図を判断するてがかりのひとつとしてある。本研究では、中国語・韓国語を母語とする中・上級日本語学習者に聴取実験を行い、表現意図（同意要求・非難・否定）を判断する能力の習得に関する研究を行った。その結果、音調から表現意図を判断する能力の習得には母語と学習レベルが影響すること、中国語母語話者は上昇＝非難ときく傾向があること、否定→同意要求→非難の順で習得する可能性があることが明らかになった。また、表現意図と音調は自然には習得しないので、意識的な学習が必要なことが示唆された。

[キーワード] 表現意図と音調、ではない(か)、聴取実験、中・上級学習者  
中国語・韓国語母語話者

1. はじめに

ある程度学習段階が進んだ中・上級学習者にとって日本語がむずかしいと感じる一要因に、話者の表現意図がわかりにくいことがある。話者の表現意図を判断するには、鮎沢(1989)で指摘されているように前後の文脈、非言語的要素などとともにイントネーションやポーズなどの音声がてがかりとなる。特に文末音調に関して大石(1965)は、「話し手の気分・態度に従う」といった付加的な要素にすぎない場合と、文の論理的意味を担う場合があると指摘し、音調が意味の決定に重要な役割をはたす例として文末に「ではないか」をとる文をあげている。さらに犬飼(1993)は、文法が語用論や談話レベルに広がるにつれ、音声も文法の一部として考えるべきではないかと指摘している。

このように音調は文の論理的意味や話者の表現意図を担うため、話者の表現意図を判断する手がかりのひとつになると考えられるが、日本語学習者は音調により表現意図をどのようにとらえているのだろうか。

## 2. 先行研究および研究目的

第2言語を習得する際に生じる母語干渉が音声において大きいことはしばしば指摘され、知覚に関しても様々な研究がなされている。

河野(1992)は、初・中級学習者を対象として音調をどのように感じるかを主とした文末音調の知覚実験を行っている。中川(1996)は、音調と表現意図について中国語・スペイン語母語話者を対象に、母語・滞日期間から分析し、文末音調の習得には滞日期間は影響せず、母語の音調と表現意図が影響することを指摘しているが、学習レベルについては言及していない。また、福岡(1998)は、中国語を母語とする初級学習者を対象に、「動詞+ない」の表現意図(勧誘・否定)をイントネーションから識別する能力の習得研究を行い、学習早期では、自然音声なら上昇は「勧誘」、下降は「否定」と判断するが、合成音声ではピッチ差やアクセント核により知覚が困難な場合があることを指摘している。このように、表現意図と音調の研究は現在されつつあるが、まだまだ少ないのが現状である。

ところで、中国語の文末音調に関しては現在まだ研究されている段階だが、陳(1989)は、「怒りや命令を表す時は前が低く後ろが高いアクセントになる」とし、文末上昇音調について日本語とは異なることを指摘している。

中川の「文末音調の習得には、母語が影響する」という指摘、河野の「文末音調は自然に習得しない」「学習が進んでも必ずしも日本人の知覚に近づかない」という指摘があるが、では学習レベルや母語はどのように影響するのだろうか。疑問文が上昇音調になる韓国語母語話者(愷(1994))と、怒り・命令が上昇音調になる中国語母語話者では習得状況が異なることが予想される。また、学習レベルで異なりが見られるか。従来学習レベルについてはあまり言及されず、されても初級中心だが中・上級ではどうか。

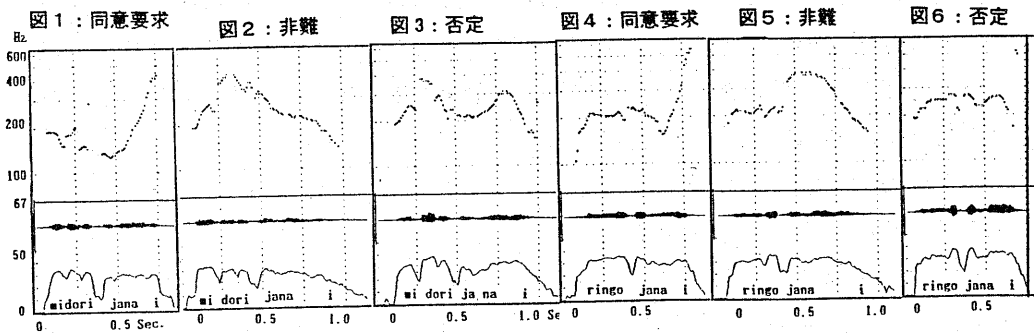
本稿では文末に「ーじゃない」(「ではないか」のバリエーション)を伴う表現について、中国語・韓国語を母語とする中・上級学習者が、音調により表現意図をどのように判断するかを、母語による影響、学習レベルの観点から研究する。この表現をとりあげる理由は、日常会話でよく使われ、表現意図も多く、かつ音調が意味の確定に重要な役割をはたすからである。(\*1)とりあげる表現意図は、同意要求・非難・否定とする。同意要求・非難は、日本語教育のシラバスに含まれることは少ないが、談話で果たす機能・音調が異なり、使用

頻度も高いからである。また比較のため初級で必ず取り上げられる「否定」も実験に取り入れる。

### 3. 研究方法

#### 3. 1 聴取実験用の刺激音について

「ーじゃない(か)」の表現意図と音調についてはまだあまり研究がなされていない。そこで「3拍名詞(頭高・平板型アクセント) + じゃない」の文で「同意要求」「非難」「否定」の状況を設定したスクリプトを作成し、東京語母語話者男女7人に各3-5回発話してもらい、音声ソフト録聞見でピッチを抽出した。持続時間、ピッチ幅、ピッチの最高値・最低値、ピッチ曲線の形状について分析した結果、持続時間についてはある傾向が出たがピッチ曲線の形状については個人差が大きかった。7人にほぼ共通したのは、「同意要求」では上昇、「否定」「非難」では下降、特に「否定」では「な」にアクセントがありピッチが下がることであった。(大塚(1997a))そこで下線部分の要件を満たし、持続時間がほぼ平均に近くかつ声色に感情的な要素があまり反映されていないもので女性の声(図1-6)を聴取実験の刺激音とした。(\*2)図1-3は頭高アクセント、図4-6は平板アクセントである。なお、図1・4を「上昇」、図2・5を「下降」、図3・6を「卓立」とよぶ。



#### 3. 2 実験手順

被験者に、前節で採用した刺激文(図1-6)を与え、表現意図を「同意要求」「非難」「否定」のいずれかから強制選択で判定させた。1刺激文を6回ずつ、計36個の刺激文を聞くようなテープを作成した。刺激文の並び方は同一アクセント内ではアランダムで、テストの慣れ・不慣れがアクセント型による聞き分けに影響しないように、頭高を先に聞くものと平板を先に聞くものの2通

りを用意した。各発話は2度繰り返され、その後約10秒間のポーズがあり、その間に表現意図を判定してもらった。なお「同意要求」「非難」といった表現では人によって解釈が異なる場合があるので状況を設定した。(資料1)回答用紙は中国語・韓国語のものも用意したが、これが必要な被験者はいなかった。

### 3. 3 実験状況

被験者が実験のやり方がわかっているかどうかを確認し、モニター室等、静かな環境で行った。実験終了後、アンケートを全員に、インタビューを一部の者に行った。実験は主に、1996年7-8月、一部追加データとして1998年10月に行った。

### 3. 4 被験者

被験者は、日本語母語話者30人、日本語学習者85人である。日本語母語話者(以下「日本人」)は中川(1996)で音調から表現意図を判断する韻律の聴取実験では性別・出身地による影響はないとしているので、全員女性で出身地はさまざまである。

日本語学習者は、中国語母語話者(以下「中国語話者」)43人、韓国語母語話者(以下「韓国語話者」)42人で、レベルは表1に示す。レベルは、「上級」は留学生・就学生で学習時間1200時間以上・日本語能力試験1級合格程度、「中級」は就学生・大学予備教育の学生で学習時間600時間以上とした。

[表1]

	中国語話者	韓国語話者
上級	20人	20人
中級	23	22

## 4. 分析結果

話者の表現意図と同様の判断をした場合には1点、異なる判断をした場合は0点とし、得点を求めた。

### 4. 1 日本人の結果

まず、日本人がある音調の時にどのように判断するかを調べるため、日本人30人の結果を、用法、アクセント型毎に平均を出した。(表2)次にアクセントの型が聞き分けに影響するかを調べるため、頭高と平板型との間でt検定を

行ったところ、 $t(29)=1.485$ となり有意差は認められなかった。以上から

①日本人は、話者の表現意図を「上昇」は「同意要求」、「下降」は「非難」、「卓立」は「否定」と判断している。

②アクセントが変わっても、表現意図の聞き分けに影響しないと考えられる。

[表 2]

アクセント	同意要求	非 難	否 定	合 計
頭 高	5.6 (93.3%)	5.3 (88.3%)	5.4 (90.0%)	16.3 (90.5%)
平 板	5.6 (93.3%)	5.5 (91.7%)	5.6 (92.8%)	16.7 (92.8%)
合 計	11.2 (93.3%)	10.8 (90.3%)	11.0 (91.4%)	33.0 (91.7%)

#### 4. 2 学習者の結果

学習者 85 人について、母語、レベルの観点から分析した。

##### 4. 2. 1 母語による影響

母語・レベルの影響を見るために、2 要因での分散分析を行った結果、母語・レベル・両者による交互作用いずれも認められた。そこで母語ごと、レベルごとに検討する。

母語ごとに「同意要求」「非難」「否定」「合計点」について平均得点と標準偏差を求め、中国語話者と韓国語話者の間で t 検定を行った。結果は表 3 に示す。

[表 3]

<上級>

(\*\*\*:P<.001, \*\*:P<.01, \*:P<.05)

母語(人)	中国語(20) 得点 (SD)	韓国語(20) 得点 (SD)	中・韓 のt値
同意要求	10.05 (2.5) (83.7%)	10.0 (2.9) (83.3%)	0.136
非 難	9.15 (2.8) (76.3%)	10.4 (2.5) (86.7%)	4.194***
否 定	10.0 (2.4) (83.3%)	10.75 (2.3) (89.6%)	29.296***
合 計	29.2 (6.3) (81.1%)	31.15 (8.3) (86.5%)	5.845***

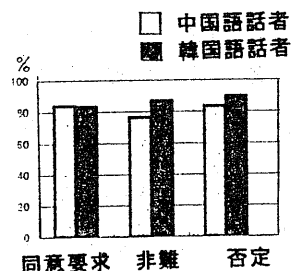


図 1 上級の正答率

<中級> (\*\*\*:P<.001,\*\*:P<.01,\*:P<.05)

母語(人)	中国語(23) 得点 (SD)	韓国語(22) 得点 (SD)	中・韓 のt値
同意要求	5.30 (4.3) (44.2%)	8.18 (3.8) (68.2%)	7.734***
非 難	5.04 (3.0) (42.0%)	8.18 (3.2) (68.2%)	11.494***
否 定	10.39 (1.8) (86.6%)	10.59 (1.6) (88.3%)	1.176
合 計	20.74 (5.9) (57.6%)	26.96 (7.2) (74.9%)	6.838***

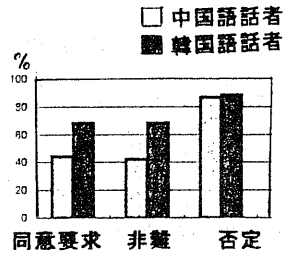


図2 中級の正答率

①上級レベルでは、中国語話者と韓国語話者間で、「同意要求」は有意差は認められなかったが、「非難」は0.1%レベルで有意差が認められ、中国語話者<韓国語話者となる。中級レベルでは「同意要求」と「非難」に関して中国語話者の正答率が低く、韓国語話者との間で0.1%レベルで有意差が認められた。

②「否定」については母語やレベルに関わらず、8割以上できている。

以上から、両母語話者ともにまず「否定」を習得すること、韓国語話者のほうが中国語話者よりも早い段階で上昇を「同意要求」、下降を「非難」と判定するようになることが考えられる。

#### 4. 2. 3 学習レベルによる影響

前節で、母語により習得の状況が異なることが認められたが、ではどのレベルでどの用法を判断するようになるのだろうか。母語別に分析する。

##### <中国語話者の場合>

前節で、レベルによる差が大きいことが示唆されたが、上級と中級でt検定を行った。また、用法による習得の異なりも考えられるので、「同意要求」と「非難」の間でもt検定を行った。結果は表4に示す。

[表4] (\*\*\*:P<.001,\*\*:P<.01,\*:P<.05)

	上級 得点 (SD)	中級 得点 (SD)	上・中級 のt値
同意要求	10.05 (2.46)	5.34 (4.27)	6.784***
非 難	9.15 (2.78)	5.04 (3.00)	7.749***
否 定	10.0 (2.35)	10.39 (1.81)	1.043

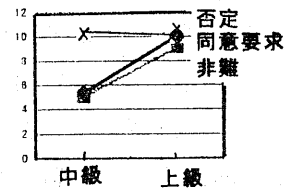


図3 中国語話者の得点

①「同意要求」と「非難」について、中級と上級の間では0.1%レベルで有意差が認められ、得点も1.8倍になっている。このことから「同意要求」「非難」の習得は、中級から上級にかけて進むと考えられる。

②全てのレベルで、同意要求>非難となっている。レベル毎に「同意要求」「非難」でt検定を行ったところ、上級では1%レベルで有意差が認められた。

①②から、「同意要求」と「非難」は中級から上級にかけて習得するが、「同意要求」の方が「非難」よりも早く習得する可能性が示唆された。

#### <韓国語話者の場合>

韓国語話者も同様の方法で検討した結果、表5のようになった。

[表5] (\*\*\*: $P<0.001$ , \*\*: $P<0.01$ , \*: $P<0.05$ )

	上級 得点 (SD)	中級 得点 (SD)	上・中級の t 値
同意要求	10.0 (2.93)	8.18 (3.81)	12.992***
非 難	10.4 (2.46)	8.18 (3.19)	5.917***
否 定	10.75 (2.34)	10.59 (1.59)	1.098

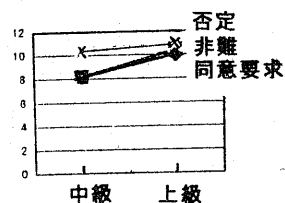


図4 韓国語話者の得点

①中級と上級の間では、「同意要求」、「非難」ともに0.1%レベルで有意差が認められる。同じレベルでは「同意要求」と「非難」の間に有意差は認められなかった。

②正答率は、全レベル・全ての用法で68%以上になっている。

以上から、中級段階でもすべての用法で約7割できているが、中級から上級にかけても習得が進むと考えられる。また、「同意要求」と「非難」では、習得に差は見られなかった。中国語話者の場合、2つの用法間で差があったが、韓国語話者の場合は特に差がないと考えられる。

#### 4. 2. 4 まとめ

以上、明らかになったことをまとめる。

①「否定」は母語に関わらず全てのレベルで約8割できている。

②母語・レベルによる影響があった。

特に中級レベルでは母語による差が大きく、韓国語話者の方が、中国語話者よりも「同意要求」「非難」ともに早く習得すると考えられる。

③中国語話者は、中級から上級にかけて「同意要求」「非難」を習得する。習得の順序は、否定→同意要求→非難と考えられる。

④韓国語話者は中級でも「同意要求」「非難」「否定」を7割近く習得しているが、上級にかけても更に習得が進む。「同意要求」と「非難」はほぼ同時に習得すると考えられる。

## 5. 考察

中国語話者と韓国語話者とでは異なりが認められた点について考察を行う。まず考えられるのが母語の音調の影響である。中国語の場合、陳(1989)は、「日本語と中国語は、非難や叱責のイントネーションが正反対」で、日本語の上昇調は語気を和らげるニュアンスを持つが、中国語の場合は非難や叱責となることを指摘している。一方、韓国語の場合は研究がまだあまりなされていないので、今回の実験と同じような状況を被験者とは異なる母語話者3名に発話してもらい分析したところ、全員「同意要求」は上昇調、「非難」は下降調となり日本語と同様の音調を示していた。(\*4)このことから被験者が母語の音調と表現意図の関係を日本語にも適用しているなら、上昇を中国語話者は「非難」、韓国語話者は「同意要求」ととらえると推測される。そこで今回の聴取実験の誤答を分析した。その結果中国語話者の場合、上昇を「非難」ととらえていたのは、両方のアクセント型では6人、片方のアクセント型の時のみは4人であり、中国語話者全体の22.3% (43人中10人) が上昇調を「非難」ととらえていたことがわかった。一方韓国語話者の場合、上昇を「非難」ととらえていたのは、両方のアクセント型では3人、片方のアクセント型のみで誤答したものは0人であり、韓国語話者全体で見ると7.1% (42人中3人) であった。

以上のことから、音調と表現意図との関係については中国語・韓国語ともにまだ十分な研究が行なわれていない段階なので断定できないが、可能性は考えられる。

では、韓国語話者は母語の音調と表現意図の関係が日本語と同じであったから、中国語話者よりも正答率が高かった、と考えるとよいだろうか。もし理由がそれだけなら、韓国語話者が中級から上級にかけて正答率が上がっていることが説明できない。ただ母語のパターンをあてはめただけではなく、「音調から表現意図を判断する能力」の習得が進んだと考えた方が妥当であろう。とするなら、韓国語話者と中国語話者で習得の早さが異なる点について考察を行う必要がある。

Omaggio(1986)は、母語以外の言語を習得する際に、学習言語と母語との系統関係により習得の早さが異なることを指摘している。表6は、英語を母語とする学習者が一定期間内に習得すると期待されるレベルを学習言語グループ毎に示したものである。(\*5)この表は、例えばレベル2に到達するのに学習言語が



①グループのスペイン語なら240時間だが、④グループの日本語なら1320時間かかることを示している。

[表6]表中の①②③④は次の言語グループを示す：①Afrikans,Spanishi,Italian,etc

②Bulgarian,German,Greek,etc③Ambaric,Bengali,Russian,etc④Arabic,Chinese,Japanese,etc

	①	②	③	④	表中の到達レベル
8週間(120h)	1/1*				0* 初 初歩的な項目が話せる 句/単語
16 (480h)	2	1/2	1	1	1-1*中 サバイバル可 文
24 (720h)	2*	2	2	1*	基本的な生活は問題なし 事実
44 (1320h)		2*/3	2*	2	2-2*上 職業生活可能となる 段階
88(2400-2760)				3	3-3*最 込み入った状況へ対処できる 事実 敬語/抽象的な話題が扱える 談話 スムーズに駆使 仮定

このように、習得の早さは学習言語と母語との類似性により変わってくる。このことは日本語教育現場で日々実感することだが、漢字圏と非漢字圏の学習者とでは、習得に要する時間が異なる。また、同じ漢字圏であっても中国語話者と日本語と文法構造が似ている韓国語話者とでは、韓国語話者の方が早く文法を習得する。

今回は中級レベルの決定を学習時間を基に行っており、中国語話者と韓国語話者の学習時間は同じと考えられるので、音調から表現意図を判断する能力の習得に関してもOmaggioの指摘と同様のことがいえると考えられる。また、今回の実験では、中国語話者と韓国語話者の差が中級では大きかったが、上級では小さくなっている。これは上級レベルの決定を学習時間だけでなく言語能力も考慮しており、学習時間が同じとはいきれないからである。

今回、母語により習得の早さに異なりがあったが、それは学習言語と母語の音調パタンの類似性によるものだけでなく、学習言語と母語の系統関係が音調から表現意図を判断する能力の習得にも影響するからだと考えられる。

## 6. 日本語教育への示唆

以上のことを踏まえ、最後に日本語教育について言及したい。

今回の実験で音調についての教育経験がある者は中国語話者44.1%、韓国語話者39.5%と低い。音調についての教育は特に必要ないのだろうか。

陳(1989)は、母語以外の言語の音調について「発音が正確でなくても、聞く人は大体理解できるし、誤解も少ない」ので一般的に音調には注意を払わない

が、「表現したかったことと異なる」音調を用いたために誤解が生じる場合があると問題点を指摘している。また今回のインタビュー調査でも音調によりミスコミュニケーションを起こし、その結果、音調の重要性を感じたという意見が複数あった。このように音調は重要な面を担っている。

今回の実験では、音調の教育経験は全体的には低かったが、正答率80%以上の成績上位者の場合、中国語話者53.3%、韓国語話者60.0%と増加している。また「否定」については中級段階でいずれの母語でもほぼできていた。「否定」は日本語教育のすべての教科書で初級段階で導入され、テープ教材もある場合が多く音声指導も行われていると考えられ、母語に関わらず中級段階では習得していたと考えられる。一方、「同意要求」「非難」は教科書で取り上げられることは少なく、音声指導も行われていないと考えられる。試みに上昇を「非難」ととっていた中国語話者5人に対し、上昇は「同意要求」、下降は「非難」となると告げ、1カ月後に2回目の聴取実験を行ったところ、正答率は「同意要求」91.7%、「非難」90.0%と上昇した。このように、音調の教育について効果がうかがえる。

しかし音調の教育経験の有無についての意識調査(実験後のアンケート調査)では、同一の教育機関に所属している者でも受けていると答えた者と受けていないと答えた者がいたり、被験者の所属先では「教えている」としている場合でも本人は受けていないと考えていたり、意識に差がある。指導を行っても、学習者の側に受け入れる準備、音調の重要性が認識されていなければ、効果が薄いと考えられる。

音声の指導については初級段階から行うことの必要性がしばしば指摘されているが、音調についての指導はあまり行われていないのが現状で、学習者が何か問題に直面するといった体験を通して重要性を感じ独習することになる。文末音調が表現意図を確定する場合や、中・上級のシラバスで取り上げられていなくても実際の会話でよく使われ、「非難」「同意要求」といった人間関係にも関わる表現については、日本語教育の場で、音調について取り上げる必要があるのではないだろうか。特に中国語話者のように母語の音調と表現意図が日本語と異なる学習者には、日本語の上昇調には基本的には「相手とのつながりを求める気持ち」がある(森山(1989))と示すだけでも効果があると考えられる。また、教育現場でとりあげる際には学習者に音調を意識させるとともに、なぜ

音調の学習が重要なのかを認識させる必要があると思われる。

今回の研究では、文末が上昇、または下降の時に表現意図をどのように判断するかに主眼をおいたものであった。強さ、ピッチ幅、持続時間などが判断に及ぼす影響や、アクセント型や、ピッチの上昇（または下降）の程度により聞き取りの難易がいかにかかわるかは、今後の課題としたい。

(注)

- \*1: 田野村(1988)は「Aではないか」を、①「Aだ」という肯定的な意味、②「Aではない」という否定的な意味、③推量に分けている。①の中には、驚き、非難、確認要求等があるとしている。
- \*2: 平板型の上昇調は、「な」で一旦下がった後急激に上昇するものと、下がらずに上昇し続けるものの2通りがある。今回は前者のパターンで発話した者が4人と多かったので刺激音として採用した。また「同意要求」は男女各1名は下降調もありうるとしたので、日本人10名に、上昇・下降の刺激音に対し同意要求・非難のいずれかを4段階で判定してもらった結果、上昇を「同意要求」としたので「同意要求」のプロトタイプの上昇とした。
- \*3: テストの慣れ・不慣れが影響しないよう、後から聞いた刺激文でまちがえた場合を分析対象とする。
- \*4: ソウル出身者2名、釜山出身者1名である。
- \*5: アメリカのFSI(Foreign Service Institute)で作成されたもので「最高・平均・最低」が示されているが、紙幅の都合上編集し直し「平均」のみを一覧表にした。

<参考文献>

- 鮎沢孝子(1989)「意味のあいまいさとイントネーション・ポーズ」『講座日本語と日本語教育第3巻 日本語の音声・音韻(下)』明治書院
- 犬飼隆(1992)「音声文法の試み」『文部省重点領域研究「日本語音声」E12班平成4年度研究成果報告』
- 今川博・桐谷慈(1989)「DSPを用いたピッチ・フォルマント実時間抽出とその発音訓練への応用」電子情報通信学会技術報告
- 大石初太郎(1965)「疑問表現の文末音調」『音声の研究11』日本音声学会編
- 大塚淳子(1997a)『否定疑問文の機能と韻律的特徴-じゃない(か)をめぐる-』

お茶の水女子大学修士論文

- 大塚淳子(1997b)「「ではない(か)」の談話機能と音調について」『言語文化と日本語教育第13号』お茶の水女子大学日本言語文化学会
- 河野俊之(1992)「日本語母語話者と外国人日本語学習者の文末音調の知覚の差異」『文部省重点領域研究「日本語音声」D1班1992年度研究成果報告書』
- 田野村忠温(1989)「否定疑問文小考」『国語学』152
- 陳文正(1989)「中国語の上昇調」『日大人文学研究所研究紀要』37
- 中川千恵子(1996)『東京語の非典型的疑問文に関する研究』お茶の水女子大学修士論文
- 福岡昌子(1998)「イントネーションから表現意図を識別する能力の習得研究-中国4方言話者を対照に自然・合成音声を使って-」『日本語教育96号』日本語教育学会
- 関光準(1994)「韓国語疑問文イントネーションの音響的分析と合成音声による知覚実験-日本語との対照研究のために」『音声学会会報』205
- 森山卓郎(1989)「文の意味とイントネーション」『講座日本語と日本語教育第3巻 日本語の音声・音韻(下)』明治書院
- 揚立明(1993)「中国語話者による日本語疑問文文末の韻律に見られる母語の干渉」『文部省重点領域研究「日本語音声」D1班1993年度研究成果報告書』
- Coder,S.(1967) The significance of learners'errors'. *International Review of Applied Linguistics V*
- Omaggio,A.C.(1986) *Teaching Language in Context*. Heinle & Heinle Publishers Inc.
- Selinker,L.(1972) Interlanguage. *International Review of Applied Linguistics X*

(お茶の水女子大学修士課程修了)

[資料]

今2人の人が共同で色をぬっています。ひとりが「みどりじゃない」と言いました。どういう意味で言ったと思いますか。

- ① 1人が「ここはやっぱり、緑がいいね」と言う意味でいい、相手が同意することを期待する。
- ② 「緑とちがう(赤だ)」という意味で言っている。
- ③ 緑にしてください、と言ったのに黒くぬった相手に「私が言ったのは緑だ」と非難するよ  
うに言っている。